

2019年、第16回チャイコフスキー国際コンクール第2位！
世界が注目する若きヴィルトゥオーゾ、待望の札幌初リサイタル！

© Dvile Sermokas

MAO Fujita

Piano Recital



プログラムを決める際、今大事に考えていることが三つある。一つ目はこれまでに取り組んだことがない曲。なぜなら常に新しい曲と対峙する事で、自分自身が驕らないようにするためである。既にレパートリーとしている曲を選んでしまうと、日々の練習において怠慢になりがちだ。二つ目は形式や構成がしっかりしている曲。近年モーツァルトの楽曲に取り組んできた中で、構成の美しい作品においてアイデアを厳選、精査、そして自分の解釈へと昇華させるコツを心得たからだ。三つ目は自分がその作品にどれだけ愛を注げるか。長い時間かけて作品と向き合い、熟考しながら日々鍛錬を重ねる上で、嫌いな作品に無理に取り組む必要はないと考える。趣向も生きていけば自ずと変わるため、今現在好みではない作品も、いずれは取り上げるほど好きになると信じている。

以上を踏まえた上で今回のプログラムの紹介をしよう。ショパン《ポロネーズ》より作品26、40、44、53、61の7曲とリスト《ピアノ・ソナタ》だ。今回取り上げるショパンのポロネーズは彼がポーランドを離れパリに移って数年後から晩年までの、まさに円熟期に書かれた。どの作品においても確実に最適な和音を選択する、鍛え抜かれた彼の審美眼を堪能できる。一方でリストのソナタは、天国を感じさせるような美しいハーモニー設定、または地の底から轟くような重厚且つ強靱な和音の連続や、何やら蠢いたり囁くような映像描写までも音で表現している。これほどまでにピアノの特性を活かした曲はあるだろうか。

さて、もしかしたらお気づきの方はいらっしゃるかと思うが、私はいくつかのポロネーズとリストのソナタは以前リサイタルで取り上げたことがある。次こそは新しい楽曲を選びたいと思うばかりだ。

藤田真央

藤田真央(ピアノ) Mao Fujita, piano

2017年、弱冠18歳で第27回クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクール優勝。併せて「青年批評家賞」「聴衆賞」「現代曲賞」の特別賞を受賞。

2019年チャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞し、審査員や聴衆から熱狂的に支持され、世界の注目を集めた。

繊細かつヴィルトゥオーゾを持ち合わせ、自然体で奏でられる唯一無二の美しい音色が高く評価され、次々と世界の舞台に招かれる。ルツェルン音楽祭、ヴェルビエ音楽祭、ラ・ロック＝ダンテロン国際ピアノフェスティバル、ツィンタリ音楽祭など主要な音楽祭へ定期的に出演。2023年1月には、カーネギー・ホールにてホール主催のソロ・リサイタルデビューを果たす。最近および今後共演のオーケストラは、ゲヴァントハウス管、ベルリン・コンツェルトハウス管、ミュンヘン・フィルハーモニー管、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、フランス放送フィル、ロイヤル・フィルハーモニー管、イスラエル・フィル、RAI国立響、ミラノ・スカラ座管、読売日本交響楽団、東京都交響楽団。さらにはクリストフ・エッセンバッハ、リッカルド・シャイー、アンドリス・ネルソンス、ヴァシリー・ペトレンコといった指揮者たちからの信頼も厚い。

2021年11月、ソニークラシカル・インターナショナルと専属レコーディングのマルチアルバム契約を締結した。2021年ヴェルビエ音楽祭でのモーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏が好評を博し、2022年10月にはスタジオ録音による待望のモーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲集をリリースした。